

(2) 応募並びに採択状況

平成 16 年度のこれらの研究課題について、99 件 (143 名) の応募があり、運営委員会共同利用研究専門委員会 (寺尾恵治, 長谷川寿一, 山極壽一) 並びに共同利用研究実行委員会 (清水慶子, 友永雅己, 渡邊邦夫, 濱田穰) との合同会議において採択原案を作成し、協議委員会 (平成 16 年 2 月 9 日) の審議・決定を経て、運営委員会 (平成 16 年 3 月 30 日) で了承された。

その結果、91 件 (135 名) が採択された。各課題についての応募・採択状況は下記のとおりである。

課題	応募		採択	
計画研究 1	6 件	(14 名)	6 件	(14 名)
計画研究 2	12 件	(13 名)	12 件	(13 名)
計画研究 3	4 件	(5 名)	4 件	(5 名)
計画研究 4	14 件	(17 名)	14 件	(17 名)
計画研究 5	6 件	(8 名)	6 件	(8 名)
自由研究	36 件	(59 名)	32 件	(55 名)
施設利用	21 件	(27 名)	17 件	(23 名)
			内 1 件辞退	

2. 研究成果

(1) 計画研究

1-1 サル類におけるミクロスポリジア感染の疫学

古屋宏二 (国立感染研究所・寄生動物),
松林伸子, 松林清明 (京都大・霊長研)

サル類特に日本ザルにおけるミクロスポリジア *Encephalitozoon cuniculi* 感染の血清疫学的研究を行った。1989-1999 年に採取した 46 血清検体と 2004 年に採取した 45 血清検体を使用した。Soluble antigen enzyme-linked immunosorbent assay (SA-ELISA), Whole cell ELISA (C-ELISA) 及び Western blot (WB) による間接酵素抗体法で IgM, IgG, IgA 抗体の分別測定を行った。1989-1999 年採取検体の SA-ELISA による平均 ELISA 値+SD 値は、IgM 抗体が $0.182+0.097$, IgG 抗体が $0.043+0.04$, 2004 年採取検体では IgM 抗体が $0.23+0.14$, IgG 抗体が $0.012+0.028$ と何れもかなり低い値を示した。因みに、*Encephalitozoon* 流行リスザル群 19 血清検体の IgG 抗体の平均 ELISA 値+SD 値は $1.7+0.591$ であった。C-ELISA 測定では、91 検体のうち 6 例 (6.6%) が 200 倍以上の抗体価を示した。IgM 抗体が 2 例, IgG 抗体が 1 例, IgA 抗体が 1 例, IgM 及び IgG 抗体が 2 例に認められた。このうち 4 例は 1989-1999 年採取検体, 2 例は 2004 年採取検体であった。WB 分析により、C-ELISA で 200 倍以上の血清検体は、IgM 抗体 400 倍, IgG 抗体 800 倍の反応性を示す多バンド形成の検体であることが判明した。以上の成績は、今回研究対象にしたニホンザルが血清疫学的に *Encephalitozoon* 非流行のコロニーからの群であったことを示す一方、*Encephalitozoon* 感染初期あるいは自然免疫の個体が本群に存在していたことを示唆するものと思われた。

1-2 霊長類における心理的幸福の評価と長期モニタリング法の開発

森村成樹 (林原生物化学研究所・類人猿研究センター)

飼育下霊長類では心身両面の健康に配慮する必要がある。物理的・社会的環境は個体の行動に大きく影響し、劣悪な環境では心理的幸福が損なわれて常同行動や自傷行為などの行動異常が生じる。心理的幸福の評価法の確立を目的とし、本研究ではニホンザルのケージ単独飼育 3 個体と屋外集団飼育 19 個体を対象に、環境に強く影響される行動を調べた。屋外個体では環境エンリッチメントとしてタワー設置前後で行動を比較し、3 次元空間拡充の影響も検討した。行動を採食、